

大学、企業がウォールスタット 用いた研究成果を報告

様々な場面で活用

耐震性能見える化協会

耐震性能見える化協会(中川貴文理事長)は9月22、23の両日、「ウォールスタットカノンファレンス2028」をオンラインで開

催した。ウォールスタットを使った研究を、1日目は大学、大学院の学生が、2日目は企業が発表した。中川理事長は「ウォールスタットVer5をリリースして次のメジャーアップデートへ開発を進めている。引き続き研究、実務で活用してほしい」とあいさつした。

1日目は、難波宗助氏(京都大学生存圏研究所)が「5階建木造軸組工法の構造設計と実大震動実験による検証—時刻歴応答解析による実験応答予測・追跡」を発表。5階建て木造建築の実大震動実験とウォールスタットによる時刻歴応答解析の結果を比較。JMA神戸とKINET小千谷の地震での層間変形角、アンカーボルトの変形

などを比較した。

前田穂乃花氏(相山学園大学生活科学部)は「伝統木造建物の柱脚固定状態を考慮した制震補強に関する研究」の成果を発表。文化財などの伝統木造建築物の耐震補強について、柱脚固定による耐震補強と伝統的な柱脚フリー(石場建てなど)をウォールスタットスタッドで簡易解析し、さらにウォールスタットオリジンで詳細解析を行った。

2日目は、近藤奈緒氏(さくら構造)が「ウォールスタットを用いた木造住宅の耐震性能評価について」報告した。さくら構造はRC造、S造の構造設計を手掛ける。来月高耐震で低コストの建物を発表する予定で、将来は木造にも参入したいとしたうえで、ウォールスタットの入力で46条壁量と準耐力壁、余力まで含めた入力を行った際の耐震性能の違いをモデルを用いて検討した。